

令和元年6月8日現在

機関番号：32414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770165

研究課題名（和文）日本語あいさつ表現に関する変化モデル構築の研究

研究課題名（英文）Research on construction of change model for Japanese greeting expression

研究代表者

中西 太郎（Nakanishi, Taro）

目白大学・社会学部・専任講師

研究者番号：30613666

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、あいさつ表現の使用実態が未解明であった地域を中心に調査し、あいさつ表現の運用に有用な記述を進めるとともに、あいさつ表現の研究手法を深化させた。そして、それをもとに、世代差、言語地理学的観点で、変化の動態の考察を行った。さらに、その考察を踏まえ、現在のあいさつ表現変化のモデルを修正し、地域ごとのあいさつ表現定型化を推定する、より確度の高い精密な変化モデルを構築することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、各地のあいさつ表現の運用に資する資料を蓄積するとともに、諸要因からあいさつ表現の使用実態を推測する、より確度の高い精密な変化モデルを構築することができた。このことによって日本語あいさつ表現の変遷過程や、あいさつ表現使用実態の地域差が生じる理由の解明に近づくことができた。さらに、他言語のあいさつ表現の在り方を説明する、言語普遍的なあいさつ表現研究への挑戦を可能にする基盤を築いた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigated mainly in regions where the use of greeting expressions was not yet clarified. We advanced the description useful to the operation of the greeting expression and deepened the research method of the greeting expression. Then, based on that, we considered the dynamics of change in terms of generational differences and linguistic geography. Furthermore, based on the consideration, the present model of greeting expression change was revised. As a result, we successfully constructed a more precise change model that infers the formularization of greeting expressions in various regions.

研究分野：日本語学、方言学、社会言語学

キーワード：あいさつ表現 定型化 言語行動 言語的発想法 待遇表現

1. 研究開始当初の背景

従来の日本語のあいさつ表現の研究は、「おはようございます」や「こんにちは」のような典型的なあいさつ言葉を中心に扱い、典型的な使用場面を記述することに主たる関心が寄せられてきた。しかし、近年は、「どこへ行く」などの非定型の表現も含む現実のコミュニケーションを視野に入れ、あいさつ表現の使用実態を捉える研究の必要性が唱えられている(學燈社 1999 『国文学解釈と教材の研究 特集 あいさつことばとコミュニケーション』44-6 など)。さらにその使用実態の記述をもとにした変化の研究など、発展的な研究も期待されている(江端義夫 2002 「談話・言語行動の方言地理学」『方言地理学の課題』など)。筆者は、これらの指摘を踏まえ、待遇的観点で日本各地の使用実態を記述し、その記述をもとにして発展的なテーマとしての変化の動態を扱うことに成功した。例えば、これまでに次のような成果を挙げている。

共通語の出会いのあいさつ表現が敬語に相当する待遇的機能を持つことを明らかにし、さらに午後の「おはようございます」の使用など、近年の特徴的なあいさつ表現の変化のいくつかは、待遇的に利便性のある表現を志向したがゆえに起きたと説明した(中西 2008 他)。

東北や四国、九州、沖縄など全国 193 地点で待遇的観点での記述を行い、その使用実態の地域差を明らかにした。それぞれの変化の動態について考察し、あいさつ表現変化の大局的な流れである「定型化」と、それに抗する「待遇的側面目当ての変化」、両方が起こっていることを新たに見出した(中西 2011 他)。

そして、変化に関わる諸要因を整理し、あいさつ表現の変化モデル(図 1)を得た。これまでの調査成果では、矢印で表されるそれぞれの要因について、黒で示す要素が強くなるほど、定型化が進んでいるということが言える。

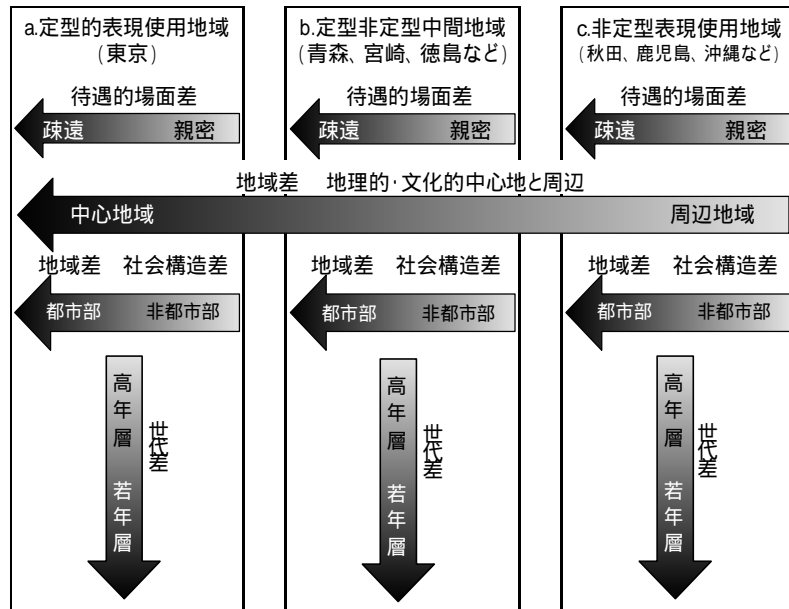


図 1. あいさつ表現の変化モデル

2. 研究の目的

上述の背景を踏まえて、本研究では、これまでの研究成果に加え、調査対象の地域と場面を拡大して記述調査を行い、そのデータをもとに、これまでの研究で得た日本語あいさつ表現の変化モデルを検証し、必要に応じて修正を図り、日本語あいさつ表現の変化モデルを確立することを目的とした。

なお、あいさつ表現の地域差として、大きく a. 定型表現使用地域、b. 定型非定型中間地域、c. 非定型表現使用地域があることが明らかになっている。その枠組みを頼りに代表的な地域を設定して使用実態を記述し、変化モデルの構築を行ってきた。本研究では、その過程で明らかになった東西の使用実態の地域差を踏まえ、東西のバランスを加味して使用実態を調査し、その資料をもとにして図 1 のあいさつ表現変化のモデルを検証する。また、対象のあいさつ場面も広げてより普遍的なモデルの確立を目指し、次の(1)～(3)を行うことにした。

(1) あいさつ表現使用実態の解明

まず、変化の動態の考察の基盤となる使用実態の調査を行う。a、b、c、それぞれの地域について代表的な地域を選び、次の 2 つの視点で、調査を行う。

- (1) - 言語地理学的な視点での調査(分布調査)
- (1) - 社会言語学的な視点での調査(世代差調査)

(2) あいさつ表現変化の動態の考察

- (1) の資料をもとに、地域差や世代差の観点であいさつ表現の変化の動態を明らかにする。
- (2) - の調査結果を踏まえ地理的動態の考察を行う。
- (2) - (1) - の調査結果を踏まえ世代差から見た変化の動態の考察を行う。

(3) あいさつ表現の変化モデルの検証

(2) 及びこれまでの研究成果をもとに、定型化や待遇的側面目当ての変化という言語変化の内的要因、世代差や都市化の度合いの関わりという言語変化の外的要因、それぞれのあいさつ表現の変化への影響を整理し、あいさつ表現の変化モデルを必要に応じて修正、確立する。

### 3. 研究の方法

本研究の目的であるあいさつ表現の待遇的観点での記述を推し進め、あいさつ表現の変化のモデルを構築するために、本研究では、使用実態の調査の手法の妥当性が出発点にして、研究の根幹となる。そのため、本節では、(1) あいさつ表現使用実態の解明の方法について詳述する。

具体的な対象地域としては、これまでの調査で相対的に地点が少ない西日本を中心に、a 定型的表現使用地域(京都、大阪/福岡)、b 定型非定型中間地域(石川/高知/長崎、熊本)地点、c 非定型表現使用地域(八丈島、天草諸島、甕島列島、奄美諸島など)を予定していた。

調査法はこれまでと同様、あいさつをするかしないかという言語行動までを視野に入れた面接調査法である。使用実態の地域差の解明においては、次のような点が焦点となる。

一地域内での、待遇的場面の異なりごとの使用表現の差の検証

筆者は、目上の相手に定型的表現「おはようございます」を用いる定型的表現使用地域でも、親しい同年代の相手には「おはよう」を用いるとは限らず、「どこさ行く」や「元気が」といった行先尋ねや調子伺いなどの非定型表現を用いることがあると明らかにした(中西 2011)。そこで、本研究の対象地域においても、待遇的場面別の表現の差について記述する。

一地域内での、様々な場面間の使用表現の定型化の度合いの差の検証

筆者は、これまでに朝のあいさつ表現と日中のあいさつ表現の比較分析を行い、全国的に見ても、日中のあいさつ表現が朝のあいさつ表現に比べ、非定型表現が多く現れることを見出した(中西 2014)。そこで、本研究の対象地域それぞれにおいて、晩の出会いや、別れ、買い物、感謝の場面など、他の場面も視野に入れて記述し、定型化の度合いの差を検証する。

多地域間の使用実態の地域差の検証

、が明らかになっていないことに付随して、その地域の使用実態の総体が、他の地域とのそれとどう異なるか、その詳細な特色が明らかになっていない。筆者のこれまでの研究で、例えば、北東北地方と南九州地方について、同じ非定型表現使用地域でも、その使用実態の内実に違いがあるということが示された(中西 2011)。そこで、調査で得た資料をもとに、本研究の対象地域それぞれの使用実態の在り方にも、そのような使用実態の違いがないかを検証する。

研究開始当初、こういった手法を中心に進めるつもりであったが、近年の言語行動の研究の進展により、言語行動の談話調査(小林・内間・坂喜・佐藤 2015)及び通信調査(篠崎・中西 2017)の有効性が示されるに至った。そこで、開始当初の研究手法に加え、言語行動の談話調査、アンケート調査を取り入れ、定型化の検証と、あいさつ表現の変化モデルの精緻化、確立を目指すことにした。

### 4. 研究成果

#### (1) あいさつ表現使用実態の解明について

本研究の1つの柱となる、あいさつ表現使用実態の解明については、各地で面接調査を実施し、a.定型的表現使用地域については、兵庫、大阪、千葉、b 定型非定型中間地域については、愛知、長崎、宮城、c 非定型表現使用地域については、島根、北琉球地方、南琉球地方、とそれぞれの地域で待遇的場面ごとの使用実態を解明し、研究基盤となる調査資料を得るに至った。

さらに、研究進行過程で近年の言語行動研究の進展を踏まえ、調査手法の検討を経て、言語行動の談話調査、アンケート調査も実施した。言語行動の談話調査は、東北大学方言研究センターの取り組みの一環として参加した宮城県名取市、気仙沼市の調査成果(東北大学方言研究センター(2014・2015・2016・2017))を利用し、多場面の言語行動の展開まで射程に入れたあいさつ表現の使用実態に関する検討を行った。また、アンケートは、山形県、宮城県、群馬県、東京都、愛知県、大阪府、岡山県、広島県、徳島県、福岡県、宮崎県の11地点で行い、各地点50~200名ほどの調査データを得るに至った。

以上の調査成果を踏まえ、本研究により使用実態を解明した地点は次頁図2の通りとなる。これらの使用実態データから、例えば、次のようなことが明らかになった。

徳島県、琉球地方、九州地方などの使用実態に共通する特徴から、定型化に影響する要因として、地域特性としての言語的発想法が働いている(中西 2015)。

気仙沼市のあいさつ表現の使用実態には、言語的発想法の地域差における東北地方の特徴、すなわち、言語的発想法における未発達地域としての特徴が各所に見られる(中西 2019a)。多様なあいさつ場面を扱うことで、より精密に地域の定型化の実態とあいさつの地域的特徴を洗い出すことができる(中西 2019a)。

今まで定型化の一段階として捉えられていなかった特定の相手に呼びかける特徴が地理的周辺部の使用実態に共通して見られ、それが定型化の一過程として捉えられる(中西 2019b)。談話資料を扱うことで、発話のやり取りを射程に入れた定型化の過程を洗い出せる(中西 2019b)。例えば、宮城県のあいさつ表現の使用実態は呼びかけ表現や応答表現を伴っており、その点で完全な定型化には至っていないと判断される。

#### (2) あいさつ表現変化の動態の考察について

(1)を踏まえたあいさつ表現変化の動態の考察では、次のようなことが明らかになった。

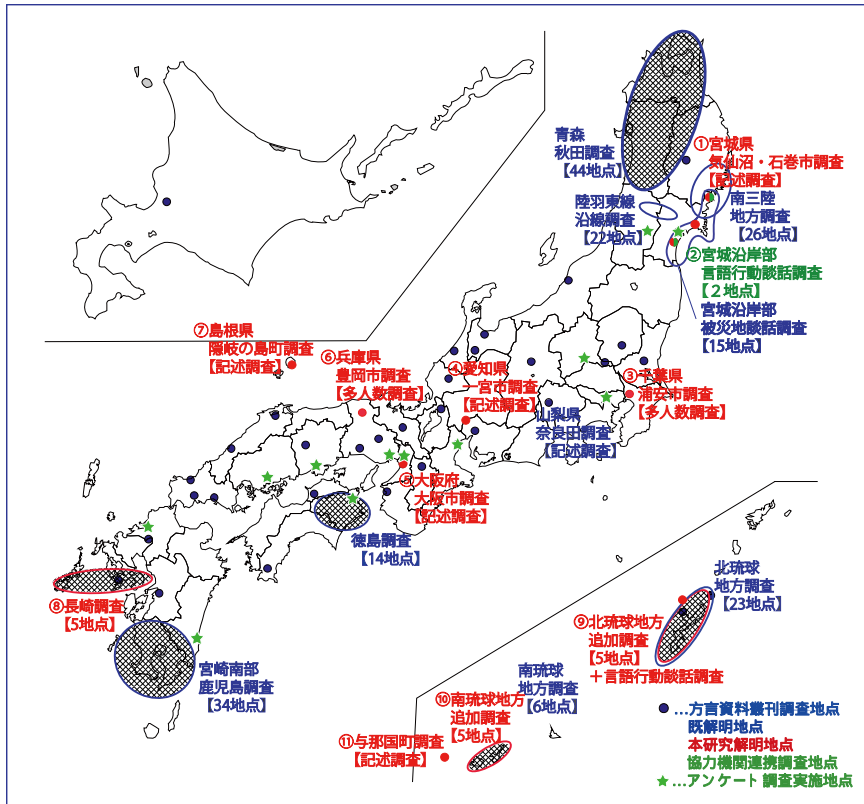


図2. あいさつ表現使用実態の解明地点

地方都市間（気仙沼市と名取市）においても、都市化の度合いに応じた定型化の差が見られる（中西 2019b）。

談話資料においても都市化による定型化の度合いの差が見られる（中西 2019b）。多様な出会いの場面を扱うことで、場面間の定型性の段階を精密に判断できる（中西 2019b）。世代差の観点において、近畿地方など西日本の地域の一部の高年層は、定型的表現 + 定型的表現、ないし定型的表現 + 非定型表現など、構造的な定型化を見せるのに対し、同地域の若年層は、定型的表現のみなど、要素的な定型化を見せる傾向がある。

### (3) あいさつ表現の変化モデルの検証について

本研究で得られたデータをもとに、図1のあいさつ表現の変化モデルを再検討した結果、本研究により得られた変化モデルは以下のように修正された（図3）。

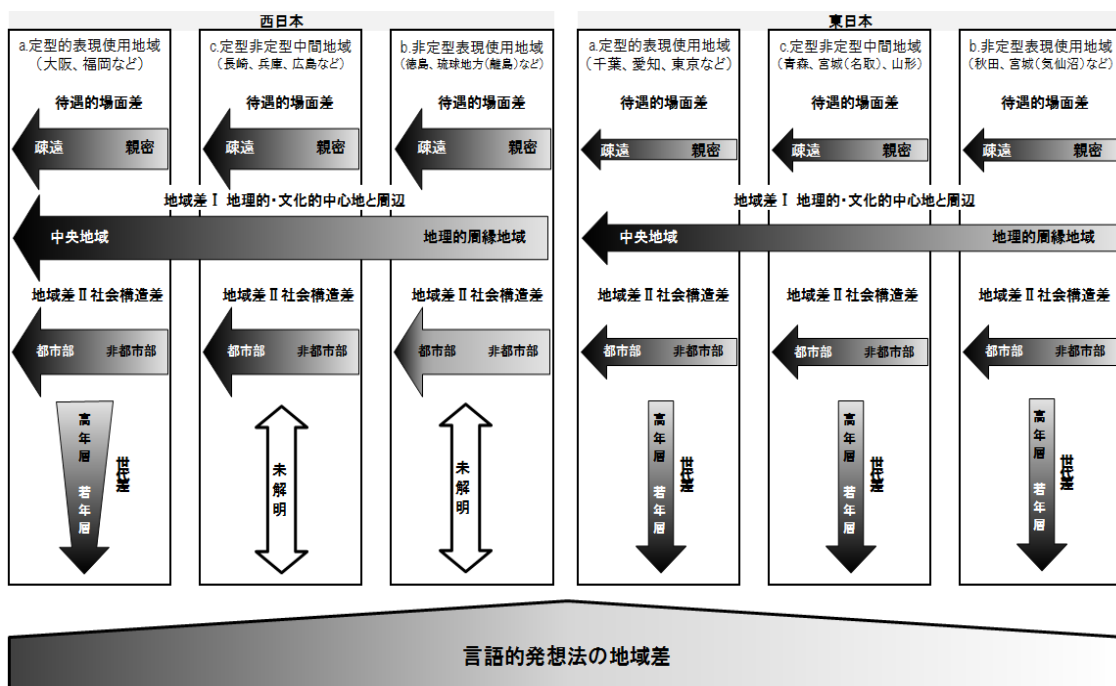


図3. あいさつ表現変化のモデル修正版

矢印で表されるそれぞれの要因について、黒で示す要素が強くなるほど、定型化が進んでいるというのは図1と同様である。ただし、西日本と東日本では、定型化の様相を大きく2分する修正をしている。具体的に東西の違いというのは、図中のそれぞれの要因を表す矢印の太さに現れている。この太さは、定型化の際の重層性の差を表している。つまり、西日本は、「オハヨーゴザイマス、オセワサンデス」のように、いくつかの決まりきった表現を重ねるような定型化を果たしていくのに対し、東日本は「オハヨーゴザイマス」のような単純な定型化を果たすということである。ただし、今回検証した要因の中で、世代差については、定型的表現使用地域で若年層に向けて単純な定型化に向かう傾向が見られた。西日本のb・cの地域の世代差については、今回の研究期間内に十分なデータが得られなかったため未解明としている。また、a～cの地域ごとに、矢印の要因それぞれによる定型化の進度に濃淡があることも分かった。

そして、このような東西の定型化の差を生む根本的な要因として、言語的発想法の地域差があることが推定できた。西日本が言語的発想法の地域差を受け、このような構造的な定型化を志向するという事は、『全国方言資料』を用いて朝の訪問場面のあいさつの分析を行った小林(2017)によっても指摘されており、本研究の成果と合わせて定型化の地域差を示唆している。

#### (4) 本研究の意義

本研究の検証によってあいさつ表現変化のモデルを修正し、より確度の高い精密な変化モデルを構築することができた。このことによって日本語あいさつ表現の変遷過程や、あいさつ表現使用実態の地域差が生じる理由の解明に一步近づくことができたと言える。また、本研究の進行過程で、言語行動の談話収集調査やアンケート調査に着手し、その分析を通して研究手法としての有効性を示すとともに、特に、あいさつ言語行動の談話展開の定型化まで視野に入れた考察を実践し、その方向での研究視点を確立できたことは、研究開始当初の見通しを超え、あいさつ研究の新たな切り口をもたらす大きな研究成果とも言える。そして、日本語のあいさつ表現変化のモデルとの対比で、他言語のあいさつ表現の在り方を説明し、その変遷を扱う取り組みへの礎を築くことができ、その意味で、言語普遍的なあいさつ表現変化の研究への挑戦の土台作りを着実に推し進めることができたと言える。

#### (5) 今後の展望

本研究では、あいさつ表現の使用実態について、定型化の性格が異なる各地の代表地域の使用実態を記述してきた。その際、以前のモデルを構築した時に不足していた東西の地域差のバランスに配慮したデータ収集を心掛けたが、世代別のデータ収集の面で不十分な地域が残り、変化の動態の考察、傾向の詳述が十分にできなかった。その点であいさつ表現変化のモデルもいまだ完全なものとは言えない。

また、すでに定型化の要因を特定した地域においても、より細かな地域差がある可能性があり、使用実態未解明の地域の記述を中心にして進め、全国的にもっと緻密な地点設定での検討を踏まえ、あいさつ表現変化のモデルの検証、精緻化が必要となってくる。

そして、日本語の変種をもとにして構築したあいさつ表現変化のモデルが言語普遍的なものなのか、他言語と比較することで解明していくことが求められる。筆者は、すでに台湾語のあいさつ表現との比較に着手し、日本語の定型性判断の観点から台湾語あいさつ表現の分析、考察にも有効だという見通しを得ることができた。今後、言語普遍的なあいさつ表現モデルを構築するために、すでに着手した台湾語はもちろん、他言語へ展開していくことも課題と言える。

#### <引用文献>

小林隆、談話からみた挨拶の定型性—「おはよう」の地域差をめぐって—、方言の研究、3号、2017、77-101

小林隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実、第4章 言語生活の記録—生活を伝える方言会話集—、方言を伝える—3.11 東日本大震災被災地における取り組み、2015、89-116

東北大学方言研究センター、生活を伝える被災地方言会話集 1～4、2014・2015・2016・2017

中西 太郎、柳田が導く日中の出会いのあいさつ表現研究の可能性、柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論、2014、59-77

小林 隆、澤村 美幸、ものの言いかた西東、2014

中西 太郎、待遇的観点から見た日本語あいさつ表現の研究、2011

中西 太郎、「あいさつ」における言語運用上の待遇関係把握、社会言語科学、11 巻 1 号、2008、76-90

江端 義夫、談話・言語行動の方言地理学、方言地理学の課題、2002、329-344

學燈社、国文学解釈と教材の研究 特集 あいさつことばとコミュニケーション、44 巻 6 号、1999

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

中西 太郎、あいさつ表現定型化の実態、被災地方言の保存・継承のための方言の記録と

公開2、査読無、2019a、65-73

篠崎 晃一、中西 太郎、言語行動の東西差—準備調査から傾向を探る、東京女子大学紀要論集、査読無、67巻2号、2017、83-113

中西 太郎、言語行動の地理的・社会的研究—言語行動学的研究としてのあいさつ表現研究を例として—、方言の研究、査読有、1号、2015、77-102

中西 太郎、コミュニケーション・ギャップの一因としてのことばの地域差、明海大学大学院応用言語学研究、査読無、17号、2015、9-15

〔学会発表〕(計 4件)

中西 太郎、あいさつ表現の言語類型論に向けて：日台あいさつ表現の比較を通して、発話行為のダイナミズム—方言・歴史・文化—、2018

中西 太郎・林 青樺、食飽未(ご飯食べたか?)は挨拶表現か—日台感動詞の比較の観点から—、2017

篠崎 晃一・中西 太郎、言語行動の変異の解明に向けて、日本語学会 2017 年度春季大会、2017

中西 太郎、コミュニケーション・ギャップの一因としてのことばの地域差、第 17 回明海大学応用言語学セミナー、2014

〔図書〕(計 3件)

太田 有紀、大橋 純一、川崎 めぐみ、中西 太郎(著者他(著者他 13名、12番目)、ひつじ書房、生活を伝える方言会話[資料編・分析編] 2019b、掲載確定頁未定。

熊谷 智子、篠崎 晃一、中西 太郎、小林 隆(著者他 13名、3番目)、ひつじ書房、コミュニケーションの方言学、2018、37-64

小林 隆、川崎 めぐみ、澤村 美幸、椎名 渉子、中西 太郎、ひつじ書房、方言学の未来をひらく、2017、339-408

〔その他〕

ホームページ等

<http://disasterlinguistics.jimdo.com/> 研究成果の公開

## 6. 研究組織

### (1) 研究協力者

研究協力者氏名：津田 智史

ローマ字氏名：TSUDA Satoshi

研究協力者氏名：田附 敏尚

ローマ字氏名：TATSUKI Toshihisa

研究協力者氏名：内間 早俊

ローマ字氏名：UCHIMA Soushun)

研究協力者氏名：中澤 光平

ローマ字氏名：NAKAZAWA Kouhei

研究協力者氏名：原田 走一郎

ローマ字氏名：HARADA Souichirou

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。